実践報告

美術の相互鑑賞におけるカウンセリング手法を基とした自尊感情向上に関する考察

廣岩　裕香（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）
内野　成美（長崎大学大学院教育学研究科）
キーワード：自尊感情、構成的グループエンカウンター、積極的傾聴、相互鑑賞

Ⅰ　研究の背景と目的

1. 実践研究テーマの設定理由

美術作品はその時の自分にしか表現できない作品である。その表現する力に対し自信を持ち意欲的に制作するために、美術教師は様々な手立てを組み、授業に臨んでいる。しかし中には、積極的に指導しているにも関わらず、自分の表現に対して自信を持てず、制作過程で教師や他者に判断を委ねたり、先に進めなかったりする生徒が存在する。大学院での教育実践実習において観察を続ける中で、自己決定力の低さは、美術の作品に対する自信のなさによるものだけでなく、自尊感情の低さも影響するのではないかと考えた。

2. 本研究の目的

本実践研究では、まず、生徒が自信を持って意欲的に制作するためには、美術の技術力や発想力に対する自信と共に自尊感情そのものを高めることも重要であると仮説を立てた。そしてその仮説に基づき、自尊感情を高める手立てとしてアイデアスケッチ完成の段階に「相互鑑賞」の時間を設け、「積極的傾聴」を軸に「構成的グループエンカウンター」の手法を用いることとした。また、相互鑑賞会後に、毎授業での短時間鑑賞と教師からの肯定的態度を行い、その有効性を検証した。

3. 自尊感情を高める手立て、先行研究

美術に対する「自信」については、美術の力に対する肯定的感情とし、自尊感情と同様にローゼンバーグ（1965）が定義した2側面「とても良い（very good）」「これでよい(good enough)」で見ることとした。また、自己決定力においては、他者と比較し、優越性を持たずとも、自分自身の技術力や発想力の現時点でのあるがままの能力を「これでよい」と受容できた時にも、「自己決定力」を持つことができると考えた。

自尊感情を測定する尺度として、東京都教職員研修センター「自尊感情や自己肯定感に関する研究」（2008～2013）の「自尊感情測定尺度　自己評価シート（東京都版）」を使用した。この自尊感情測定尺度　自己シートはローゼンバーグの自尊感情測定尺度を中心とし、自己肯定尺度、自己効力感尺度等との関連も踏まえた質問項目32項目をもとに、3因子から成り立ち、①自己受容・自己評価②他者との関係性志向③自己主張・自己決定に分けられる。今研究で扱う「美術への自信」を「自己受容・自己評価」、「自己決定力」を「自己主張・自己決定」の観点に関わるものとして扱った（図1）。

また、先行研究として、竹内晋平（2007）の図画工作を通した自尊感情の形成の過程とし

ての4つの段階と、3つの傾向を参考にした。さらに、「“鑑賞されること”の効果を意識して展開された学習が“競争のない状態”“協力的な雰囲気の下で実行されれば、被鑑賞者は、自分の作品が鑑賞されたことを”成功体験“として獲得する」（竹内,2007）ために、ロジャーズの「来談者中心療法」の1つである「積極的傾聴」を基に、構成的グループエンカウンターの手法を用いることとした。

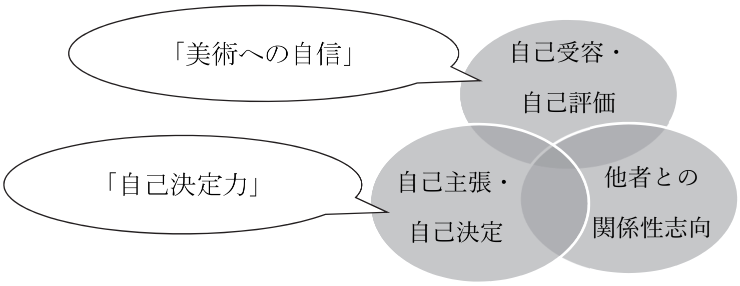


図1　自尊感情測定尺度　自己シート(東京版)における3つの因子

Ⅱ　方法

1. 対象

【実習対象学級】：長崎県A町立B中学校　2年C組　男子18名　女子16名　計34名

【調査及び授業実践】：中学2年生　161名

【期間】

・全実習期間：202X年6月9日～11月24日

　「ピクトグラム」（デザイン）

　「名画の中に入り込もう」（絵画）

・事前アンケート：9月上旬、事後アンケート：12月中～上旬

・「名画の中に入り込もう」アイデアスケッチ終了段階での相互鑑賞会：10月6日

2. 手続き

(1)「自尊感情測定尺度　自己評価シート」とアンケートによる実態把握

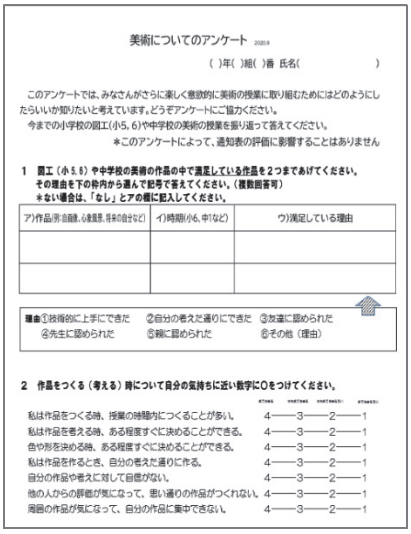
質問に対して，自分の気持ちに近い数字に○をつけてください。

「あてはまる」場合は4，「どちらかといえばあてはまる」場合は3，「どちらかというとあてはまらない」場合は2，「あてはまらない」場合は1を○で囲んでください。

<記入例>

	あてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	あてはまらない
例）冬よりも秋が好きである	4	(3)	2	1

No.	項目				
1.	私は今の自分に満足している。	4	3	2	1
2.	人の意見を素直に聞くことができる。	4	3	2	1
3.	人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる。	4	3	2	1
4.	私は自分のことが好きである。	4	3	2	1
5.	私は人のために力を尽くしたい。	4	3	2	1
6.	自分の中には様々な可能性がある。	4	3	2	1
7.	自分はダメな人間だと思うことがある。	4	3	2	1
8.	私はほかの人の気持ちになることができる。	4	3	2	1
9.	私は自分の判断や行動を信じることができる。	4	3	2	1
10.	私は自分という存在を大切に思える。	4	3	2	1
11.	私には自分のことを理解してくれる人がいる。	4	3	2	1
12.	私は自分の長所も短所もよく分かっている。	4	3	2	1
13.	私は今の自分は嫌いだ。	4	3	2	1
14.	人に迷惑がかからないよう、いったん決めたことには責任を持って取り組む。	4	3	2	1
15.	私には誰にも負けないもの(こと)がある。	4	3	2	1
16.	自分には良いところがある。	4	3	2	1
17.	自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している。	4	3	2	1
18.	私は自分のことは自分で決めたいと思う。	4	3	2	1
19.	自分は誰の役にも立っていないと思う。	4	3	2	1
20.	私には自分のことを必要としてくれる人がいる。	4	3	2	1
21.	私は自分の個性を大事にしたい。	4	3	2	1
22.	私は人と同じくらい価値のある人間である。	4	3	2	1



美術についてのアンケート 2020.9

（ ）年（ ）組（ ）番　氏名（　　　　　）

このアンケートでは、みなさんがさらに楽しく意欲的に美術の授業に取り組むためにはどのようにしたらいいか知りたいと考えています。どうぞアンケートにご協力ください。

今までの小学校の図工(小5，6)や中学校の美術の授業を振り返って答えてください。

＊このアンケートによって、通知表の評価に影響することはありません

1　図工（小5，6）や中学校の美術の作品の中で満足している作品を2つまであげてください。その理由を下の枠内から選んで記号で答えてください。（複数回答可）
＊ない場合は、「なし」とアの欄に記入してください。

ア)作品(例:自画像、心象風景、将来の自分など)	イ)時期(小6、中1など)	ウ)満足している理由

理由 ①技術的に上手にできた　②自分の考えた通りにできた　③友達に認められた　④先生に認められた　⑤親に認められた　⑥その他（理由）

2　作品をつくる（考える）時について自分の気持ちに近い数字に〇をつけてください。

私は作品をつくる時、授業の時間内につくることが多い。	4	3	2	1
私は作品を考える時、ある程度すぐに決めることができる。	4	3	2	1
色や形を決める時、ある程度すぐに決めることができる。	4	3	2	1
私は作品を作るとき、自分の考えた通りに作る。	4	3	2	1
自分の作品や考えに対して自信がない。	4	3	2	1
他の人からの評価が気になって、思い通りの作品がつくれない。	4	3	2	1
周囲の作品が気になって、自分の作品に集中できない。	4	3	2	1

図2　自尊感情測定尺度　自己評価シートと事前アンケート

（2）授業における相互鑑賞の場の設定

①アイデアスケッチ終了後の相互鑑賞会

②アイデアスケッチ終了後の相互鑑賞会後、毎授業において3分程度、短期相互鑑賞の時間の設定、教師からの肯定的態度。

③再度「自尊感情測度　自己評価シート」とアンケートを取り、授業前後での比較検討

3. 実態把握

9月の事前アンケートとして、「自尊感情測定尺度　自己シート」と共に、「満足している作品」「つくる時の気持ち」についてアンケートを行った（図2）。

自尊感情を数値順に並べ、人数が等分になるように3等分し、「高」「中」「低」の区分にわけ、各質問との比較を行った。自尊感情の得点が低い生徒は高い生徒に比べ、美術の場面においても、決定力が無かったり、美術の作品や考えに対して自信がなかったりする様子が伺えた（図3, 4）。

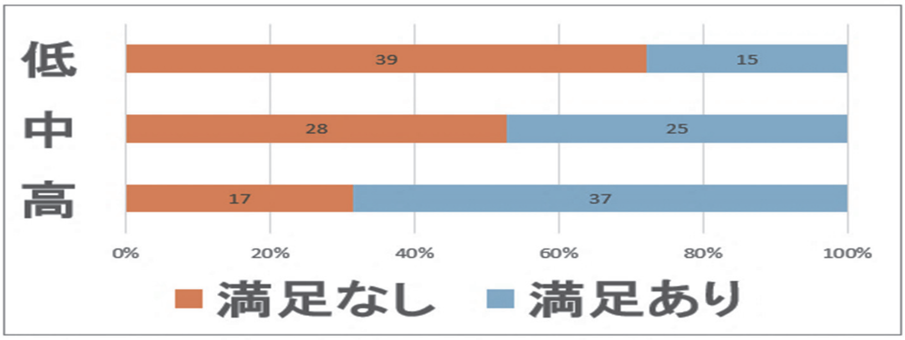


図3　質問1　自尊感情レベル別　満足している作品の有無

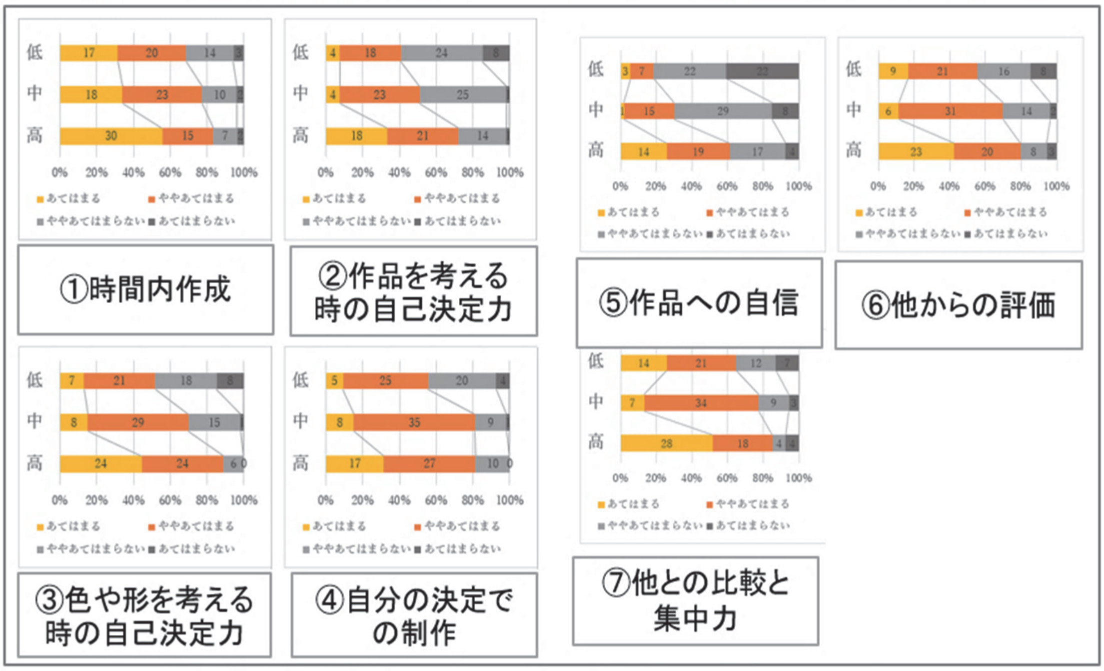


図4　質問2　自尊感情レベル別　つくる時の気持ち

Ⅲ　実践

1．相互鑑賞会

「名画の中に入り込もう」において、アイデアスケッチ終了段階時にお互いのアイデアを紹介しあう相互鑑賞会を1時間設定した。

表1　授業の流れ

内容	具体的な内容	予定時間
はじまり	今日の授業について知る	5分
①ワークシートの記入	自分の作品について記入	5分
②エクササイズ	じゃんけん質問（聴く練習）	5分
③ペア鑑賞会	お互いの作品について語る	10分
④グループ鑑賞会	それぞれの作品を「他己紹介」する。	15分
⑤ふりかえり	感想を書く。アンケートに答える	10分

まずは、構成的グループエンカウンターの手法を用い、エクササイズとして「じゃんけん質問」を行い、「積極的傾聴」の練習を行った。「傾聴」の姿勢を学ぶための3つのポイント（①うなずきながら聴く②笑顔で聴く③終わったら拍手）を「聴く姿勢」として示した。次に、エクササイズの後、お互いの作品について紹介しあう「ペア鑑賞会」（2人1組）を行った。作品の説明の後に、相手から2つの質問を行わせた。質問に迷う生徒に配慮し、質問の例を配布プリントに掲載した。また、先ほどのエクササイズで練習した「聴く姿勢」の3つの点を抑え、穏やかな雰囲気の中、相手の作品を認める気持ち（受容的態度）をもって作品鑑賞を行うことを意識させた。

その後2組のペアを組みあわせ、「グループ鑑賞会」（4人1組）を行った。「グループ鑑賞会」では、ペア鑑賞会で鑑賞したお互いの作品について「他己紹介」を行った。他己紹介を用いた意図としては、他者から作品を紹介されることで、理解されたという受容感が高まることと、他者が自分の作品を説明することにより、客観的に自分の作品をふりかえり再認識できることの2点があげられる。

最後にふりかえりを行い、シェアリングした。この一連の授業の流れを図式したものが図5である。このように傾聴を基とした構成的グループエンカウンターの手法を用いた鑑賞会を行うことで、他者の考えを知ったり、自分の作品について述べたりすることを通して、客観的に自分の作品を見つめ、作品に対する肯定的な考えを持ち、生徒自身の内面の変容を促すことができると考えた。

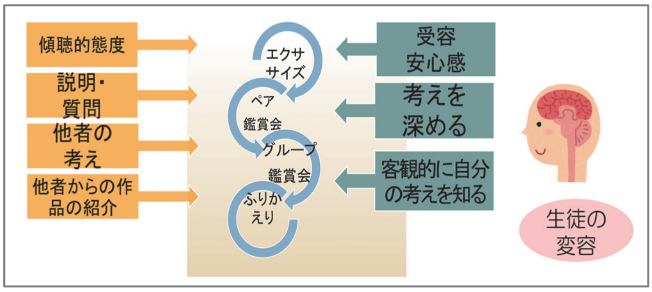


図5　活動の流れと生徒の内面の変容

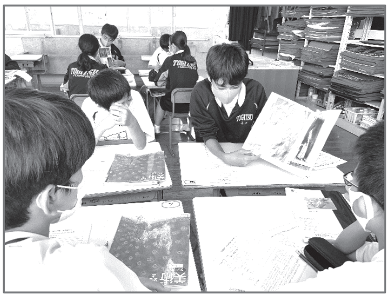


図6　授業の様子

2. 毎時間における短時間相互鑑賞

アイデアスケッチ終了後の相互鑑賞会以降、毎時間、短時間での相互鑑賞の時間を設定した。授業開始後、制作過程の説明・確認をした後、生徒が自由に動き回ってよい時間を3分程度提示した。生徒は自分が話したい生徒の所に行き、互いの作品を見せ合ったり、質問を行ったりした。

3. 教師の肯定的な態度での関わり

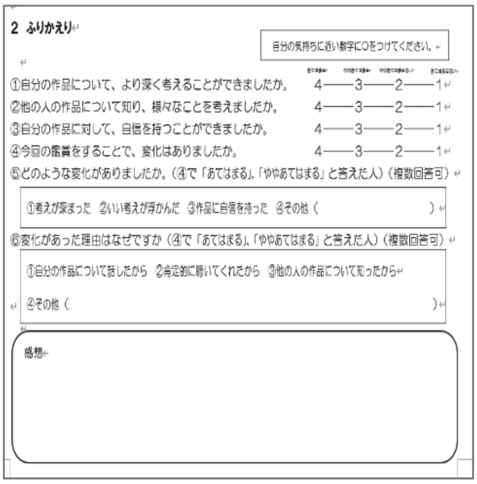
毎時間の授業中の机間指導において、教師は肯定的な態度で対応することを心がけた。具体的には、「ここがよくできている。」「線が美しい。」「いい色を塗っている。」などと生徒の作品の中で、よくできている部分を具体的に言葉で示した。よくできている部分は、他の生徒の作品との比較ではなく、その生徒の作品の中でよくできている部分を集中して認めることを心がけた。

Ⅳ　結果

1. アンケートやふりかえりの結果

（1）相互鑑賞会のアンケート

相互鑑賞会後にふりかえりとして記入してもらい、質問6項目と感想を分析した。相互鑑賞会を行ったことで、「自分の作品についてより深く考えることができた」と肯定的回答を行った生徒が94%、「自信を持った」と肯定的回答を行った生徒が85%と多くの割合を示した。「相互鑑賞会で変化があった」と91%が肯定的回答をし、変化の理由として「自分の作品について話したから」「肯定的に聴いてくれた」「他の人の作品について知れた」等が多くあげられた（図8）。



2 ふりかえり

自分の気持ちに近い数字に○をつけてください。

①自分の作品について、より深く考えることができましたか。　4――3――2――1
②他の人の作品について知り、様々なことを考えましたか。　4――3――2――1
③自分の作品に対して、自信を持つことができましたか。　4――3――2――1
④今回の鑑賞をすることで、変化はありましたか。　4――3――2――1
⑤どのような変化がありましたか。（④で「あてはまる」、「ややあてはまる」と答えた人）（複数回答可）

①考えが深まった　②いい考えが浮かんだ　③作品に自信を持った　④その他（　　）

⑥変化があった理由はなぜですか（④で「あてはまる」、「ややあてはまる」と答えた人）（複数回答可）

①自分の作品について話したから　②肯定的に聴いてくれたから　③他の人の作品について知ったから
④その他（　　）

感想

図7　相互鑑賞会後のアンケート

また、2年C組の生徒の感想の中から「自信」という言葉を抜き出し、割合を調べた。32人中8人が「自信」という言葉を書いており、25%の割合となった。また、「自信」という言葉を使用してはいないものの「改めてこの絵を選んで良かった」や「自分の選んだ作品がどれほど良いものかということがわかった」といった感想からも、自分が選んだ作品に対して自信を持っている様子が伺えた。さらに、全ての感想をテキストマイニングし、分析を行った（図9)。図9に示したとおり、回答数の多いものから①作品②うなずく③深まる④考え⑤選ぶ、考える力、肯定的、自信、できる、知れる、話しやすい、語る、持てる、ペアの順で言葉の割合が表出された。

以上のような結果から、相互鑑賞会を行い「肯定的に聴くこと」「自分の作品について語ること」「他の人の作品について知る事」により、「考えを深め」「自信を持つ」ことにつながったことが推察された。

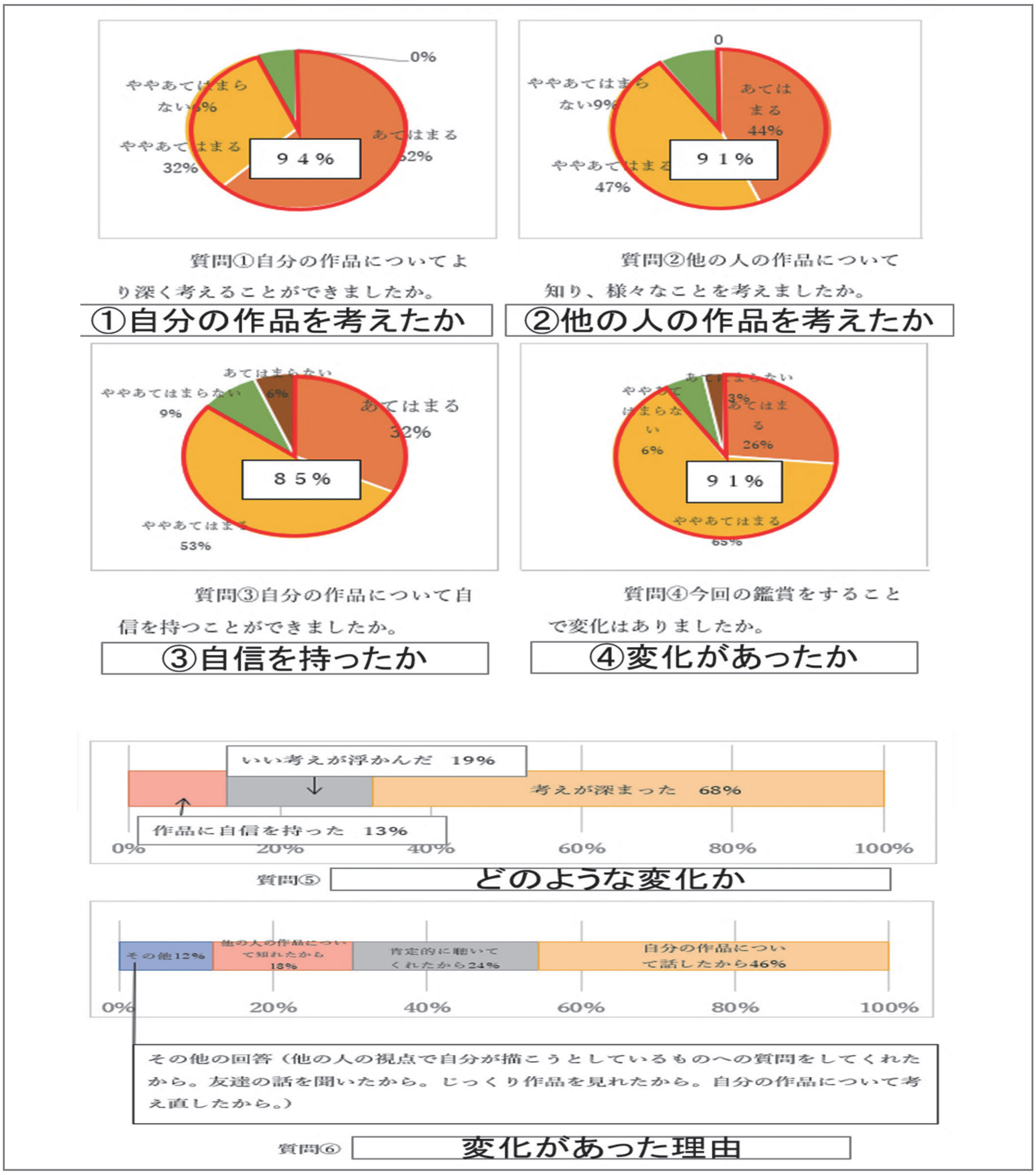


図8　相互鑑賞会後のふりかえりの結果

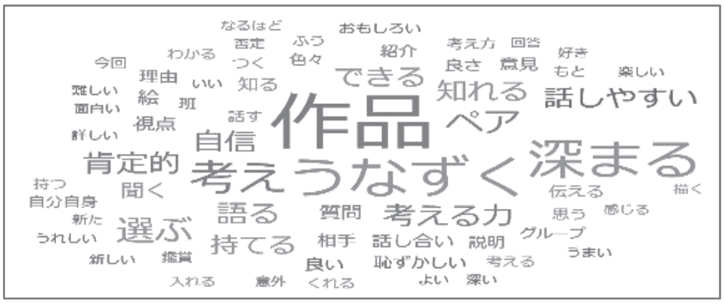


図9　各個人の感想のテキストマイニング

（2）自尊感情尺度から気になった生徒の作品及び結果の変容

自尊感情の低い順に5名を抽出し、事前、事後アンケートなどの結果を集約し、検討を行った（図10）。その結果、自尊感情の低さが同程度の数値であっても、個人によりタイプが異なり、教師は個別、対応していく必要があることが感じられた（表2）。

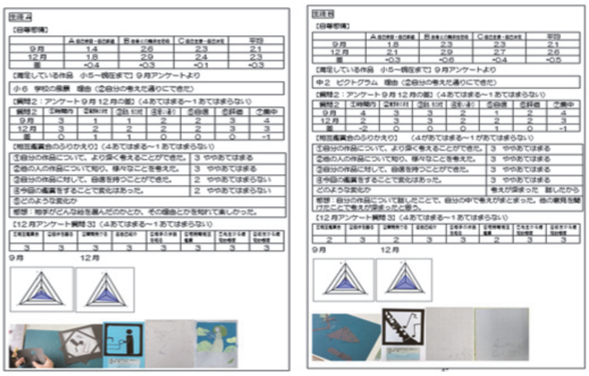


図10　各生徒の変容のまとめの一部

表2　生徒のタイプ

	自尊感情尺度（9月）	能力と自信について
生徒A	2.1	美術の能力は高いが、作品に対して自信がない。
生徒B	2.1	美術の能力は高いが、作品に対して自信がない。
生徒C	2.2	美術の能力が低く、作品に対して自信がない。
生徒D	2.3	完成度の高い作品に対しては、自信を持っている。
生徒E	2.4	美術の能力も高く、作品に対しても自信を持っている。

（3）事後アンケート

12月に再度　事後アンケートを行った（図11）。作品をつくる時どの程度参考になったかを8つの活動において質問を行い、自尊感情レベル別に分析を行った。

どのレベルの生徒でも平均値が高かった項目は「相手の作品を知ったこと」であった。

「相手の作品を知る」ことが、生徒にとって美術の授業中に影響をもたらす要因になると考えた。また、「教師、級友からの肯定的態度」は、自尊感情の得点が低い生徒の方が、影響が低い結果となった。しかし、低いからこそ、より継続して行うことも必要なのではないかと考えた。

図11　事後アンケート

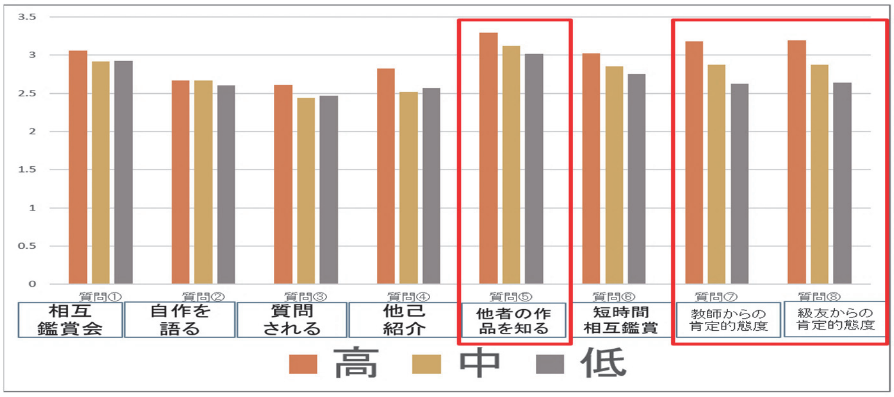


図7　事後アンケート自尊感情レベル別　質問の平均値

Ⅴ　考察

自尊感情が低いことが、美術の作品に対する自信や自己決定の低下に影響をもたらすことがあることが事前アンケートから読み取れた。

そのような中で、「積極的傾聴」や「構成的グループエンカウンター」の手法を用いた今回の相互鑑賞会の取り組みは、自信を持つことにつながり、自尊感情の向上に効果があった。また、短時間であっても相互鑑賞そのものが、思春期を迎え自分と異なる他者を知るという成長の過程において、生徒にとって効果的な取組であることが感想からもうかがえた。

事例の中には、自尊感情の低さが先にあるのではなく、本人の持っている美術の技術力の低さから美術に対する自信が低下し、自尊感情にも影響しているとみられる事例も読み取れた。両側面をバランスよく伸ばすことも必要であり、技術力の向上にむけて指導したり、出来ている部分を認知させたりすることも必要であると考えた。

なお、継続した教師の肯定的態度の効果については、データによる結果は出なかったため、今後の検討課題となると考える。

Ⅵ　まとめ

実践研究を進めていく中で、自信の中でも、他者と比較することなく、自分が考え表現したそのものに対する受容的感覚である「これでよい（Good enough）」の側面を向上させることは、生徒にとって大切な支援であることが分かった。また、「自己受容」が行われるためには、まずは安心できる雰囲気での「積極的傾聴」を行い、構成的グループエンカウンターの手法を用いた相互鑑賞会は有効であることが分かった。

「とてもよい（Very good）」と感じられるよう生徒の美術的技能力を伸ばすために、教師自身の授業力をさらに身に付けることも大切であるし、生徒に対して、自己受容が推進されるよう肯定的態度を継続して行ったり、そのような場面を設定したりすることも大切である。両側面の自信が相互に作用し、どの生徒も自分の作品に対して自信を持って意欲的に制作できるような支援を教師は行っていく必要があると考える。

Ⅶ　参考文献

東山紘久（Ed.）（2013）．来談者中心療法　ミネルヴァ書房

本波葉子・隅敦（2011）．美術への「関心・意欲・態度」を高める相互鑑賞　教育実践研究（5），149－158　富山大学人間発達科学部附属人間開発化学研究実践総合センター

堀洋道・山本眞理子（Ed.）（2009）．心理測定尺度集1　サイエンス社

國分康孝・國分久子（Ed.）（2013）．構成的グループエンカウンター事典　図書文化

藤卓（2012）．自尊感情と共有体験の心理学　金子書房

文部科学省（2017）．中学校学習指導要領解説　美術編

中間玲子（Ed.）（2017）．自尊感情の心理学　金子書房

中島義明・安藤　清志・子安　増生・坂野　雄二・繁桝　算男・立花　政夫・箱田裕司（Eds.）（2005）．心理学辞典　有斐閣

新村出（Ed.）(2018)．広辞苑　岩波書店

竹内晋平（2007）．図画工作科を通した自尊感情の形成：表現と鑑賞を関連させた実践から　美術科教育学会誌，28（0），221－233

東京都教職員研修センター(2010)．平成22年度東京都教職員研修センター紀要，第10号，3－28

ユーザーローカル テキストマイニングツール（ https://textmining.userlocal.jp/ ）